慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福田徳三著 経済学教科書
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	三田学会
Publication year	1912
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.6, No.1 (1912. 1) ,p.179- 184
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19120100-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を得ざる不幸を有する吾人の深く感謝する所なり。又我國及び獨逸學界の弊風なる他の著書に對する酷評に備ふる爲め字句の修正に意を用ひられたるは斯かる酷評を未然に防ぐ一策として吾人は大に之を歡迎せざるを得ず。例へば本文に「取捨の自由なし」とあるを正誤にて「取捨加減を」なし易らず」と改め、「增減する能はざる」を「增減し難く」となし、「常に一切」を「多く」と改め、「甚だ困難なり」を「困難なる場合多し」となせるが如し。斷言殊に否定的斷言は輕々敷なすべきものに非ざる也。

前述の如く本書は誤謬若しくは不可解の點少なきも、二三散見せるものを擧ぐれば、米國の領土擴張を論ずる項に「千八百五十三年には更に進でガヅデン Gadsden をもメキシコより一千萬弗にて買收し盡し」(五百六十七頁)云々とあるも、ガヅデンは人名にして地名に非ず。此年メキシコより買收したる土地はニュー・メキシコの一部とアリゾナにて其買收の談判を擔任せるはジェムス・ガヅデンと云ふ軍人なりしを以て此土地購入をガヅデン買收と名けたるなり。

又米國人口の增加率表（五百六十八—九頁）中「割」を用ゆべき所に「%」を用ゐたり。

獨逸外國貿易品種百分率表（六百四十三頁）中千八百八十二年の原料品の輸入割合は百分の四十八とあるべきを百分の五十八とせり。

又、同一物を百八十一頁にはカヽオとなし、百八十六頁には之をコヽアとなし、四百八頁には逆戻してカヽオと變じ、四百二十頁には再び變じてコヽアとなれり。「コヽア」は多分英語の「コーコ」cocoa の訛りにして今は日本語なり。而してカヽオ（Kakas）は獨逸語なるを以て、日本語のある以上は英語の轉訛なりとは云へ日本語なる「コヽア」を用ゆる方穩當ならん。

昨年七月にて廢棄されたる我國の條約を論ずるに當りて著者は屢々（七百十二頁一行、七百十三

頁八行、七百十七頁十二行、七百十八頁十一行等）「今回の條約」云々なる字句を用られたるも、明治四十四年十月の印刷に係る著書を讀む者の見地よりせば、昨年七月に廢棄せられたる條約は今回の條約に非ずして舊條約なり。勿論著者が執筆せられたる時には舊條約は未だ實施中なりしならんも是れは出版前に訂正せらるべき筈なりしならん。

又、七百二十八頁に「されば次に來る所の條約改正に對し、先づ第一に日米間に期待する所のものは、實に第二條但書の撤廢にありと稱せらる」とあるも、此但書を撤廢したる日米新條約は本書の印刷に先つこと六ヶ月前に批准の上發表せられたり。此項も昨年四月以前に執筆せられたるものならんも、此項より僅かに四十頁を超へて七百七十二頁に至り日米新條約に論及せらるゝを見るのみならず、他の新條約をも併せて詳評せらるゝに非ずや。本書は此部分に於て前後の連絡を缺く所尠らざるが如し。

以上は吾人の本書に對する過感の一班なるが、概して論ぜば本書は上卷に優るとも劣らざる一大著述にして、吾人は著者の勉勵努力に感謝すると同時に前書と共に江湖に推薦することを躊躇せざる者なり。

法學博士
福田德三著

經濟學教科書

大判百九十五頁（四號活字）四十四年十二月
東京大倉書店發行　定價五十錢

福田博士の新著　經濟學教科書は四十四年最後の收穫として、十二月上旬を以て世に出でたり。通卷百九十五頁、全部四號活字を以て組みたれば博士の前著經濟學講義は勿論、未完の儘なる國民經濟原論に比ぶるも量に於て遙に小なり。是れ今回の著が其の名の如く經濟學の教科書にして博士の目的は「斯學の極要點のみを簡明に說述せん」とするにありたるを以てならん。然れども今回の著が分量に於て爾かく小なるに關はらず、博士の講

遂に列したる事ある者に取つては甚大なる豫期を以て之を迎ふ可き理由あり。博士の經濟原論が完形を具して公にされたるは今回を以て始めとなすを以てなり。明治三十六年を以て公刊されたる博士の處女作國民經濟原論は國民經濟發達の階段を論述するを以て止まり、又近業經濟學講義は需要供給平均論の前、卽ち生產論の終りを以て一先づ完結したるを以て交換論分配論に關する博士の學說は未だ曾て發表されたる事なかりしなり。記者は玆に大なる喜を以て左に此書の內容一斑を記述す可し。

經濟學敎科書は先づ人間生活の活動の原因たる衝動の說明を以て始まる。而して吾人が活動の目的を自ら意識する時は之を欲望と云ひ、欲望の充足を期して起る活動を行爲と云ふ。（九—十一頁）而して欲望の對象たるものは一、外界の自然物。二、外界の自然力。及び三、勤務なるが、之等欲望の對象は欲望に比して不足なるを常とし此不足に打克つが爲めには報償を提供せざる可らず。費用卽ち是なり。此に於てか價値なる事實發生す。然らば價値とは何ぞや、博士が定義を與へて曰く「吾人の生活に於て欲望の對象に對し費用と利用とを比較して下す判斷」是なりと。（十六頁）是れ國民經濟原論に於ても亦經濟學講義に於ても發見する事能はざる新定義なり（博士の思想が此新定義に到着す可き傾向を暗示したりしや否やは別問題として）而して此定義が後に至て重要なる role を勤むる事、讀者の必ず看過せざる可き所なり。博士は尙進んで說いて曰く「吾人の行爲の中斯く費用を提供して利用を得るを指して經濟行爲と云ひ此行爲の目的たる財を經濟財と云ひ云々」と、（二十一頁）而して財とは經濟上の價値あるものゝ謂は必しも經濟財は有形財に限るとの見解を支持せられざるものゝ如し。次に今日の經濟生活が貨幣價値なる觀念と引離しては想像する事能はざる者の議論あり。（之れ經濟學講義が再三繰返して縷說する所なれば、再び述べず）基礎概念は之を以て終る。

第一篇第二章は個人經濟、國家經濟及び國民經濟を論ず。博士は最も明快なる文字を以て今日の經濟組織中に於ける三種の重なる經濟單位卽ち家族、企業、國家の特色を述ぶ。曰く、家族經濟は消費の爲め生產を營み、企業は生產の爲め消費をなす、國家經濟も亦消費を主とし、生產を從とする經濟單位にして、此點家族經濟と相似たり」と（三十一頁）而して國民經濟は是等家族、企業、國家經濟等の單位を包括する綜合經濟にして領土、人口、財產私有制度、經濟上の自由の四者を成立の要件とし、分業と交換とによりて活動する各經濟單位間の交涉により複雜なる現象を生ずるものなり（三十三—三十七頁）

第三章は國民經濟發達論なるが、其第二節に於て經濟發達の順序を分つて交換なき時代、物々交換の行はるゝ時代及び貨幣經濟の時代となす、普通の學說を難じ物々交換の時代は完全なる交換經濟にあらず、故に自然經濟は卽ち自足經濟にして交換經濟は卽ち貨幣經濟なりとして大過なしと云はる。之れ博士の宿論なり。次で第三節は我邦經濟發達の概略を叙べ、其末段に於て經濟階級を分ちて家族經濟、都市經濟、國民經濟となす、獨乙學者の說は我邦に適用し難しと說き、次に章を改め「經濟學の意義」を略說して第一篇は終る。

第二篇生產論に於て注目す可きは生產要素論なり。博士は先づ生產の根本的要素なるものを說く（一）發働の要素……人間の意思（二）實行の要素……人間の勞働（三）受働の要素……自然界（物、力、）是なり。經濟發達の度低き時代に於ては發動の要素と實行の要素とは同一人の兼ぬる所なりしが、今日に於ては「發働の要素として企業なる別箇の要素起り」又昔にありては受働の要素は單に土地あるのみなりしが、私有財產制度の發達に伴ひ此

外に資本なる一要素を生じたり。故に今日生産の要素たるもの(一)企業、(二)勞働、(三)土地、(四)資本なり。(六六頁)アダムスミスに源を發し、セーに依て創められたる所謂生産三要素論に對し博士が不滿足の感を懷かれし事は經濟學講義の讀者には改めて說く必要なかる可し。生産要素各論の內容を紹介するは紙幅之を許さざるを以て姑らく措き、たゞ企業の發達及び意義を說く二節に最も興味を感じたる事を記すに止めん。土地、勞働に關する說明は既に詳しく經濟學講義に見へたり。而して第六章に資本の本質を論じて「資本とは餘剩價値を生ずる目的を以て使用せらるゝ私有財産」にして「同種の倍加」を以て其特性とすと云はれたるフックス教授が自己保存と收益の獲得是れ資本の本質なりと說かるゝと其の感を同ふするものと解して不可なかる可し。此に注意す可きは博士が資本の概念を述ぶるに方つて全然私經濟的若しくは個人的見地よりせられたる事之なり。既に定義に於て「資本とは……私有財産なり」と云はる。故に所謂社會的資本、又は國民經濟的資本の觀念を否定せらるゝ事明白なり。

第二篇を讀み終れる者は再び始めに歸つて卷頭の目次を吟味する事必要なり。蓋し經濟學教科書の內容或は普通の慣例たる生産交換分配消費の四ッに區分されざるを以てなり。第三篇は題して流通と云ふ。流通とは經濟的單位間の價値的交換關係の總稱なり(百十一頁)流通には交換と分配と含まるれども、實際に於ては交換行はるれば必ず分配起り、分配せんと欲せば必ず交換によらざる可らずして。兩者は離して考ふる事能はざるものなりとは博士の見解なり。流通論の第二章は貨幣及信用を論じ第三章に於て價格を說き第四章は所得を說明す。貨幣論の中にて吾人の注意を喚起したるは貨幣は交換の要具にあらずして流通の要具なりとの說是なり(百十六—十八)貨幣は交換の要具なりとは經濟學上に於ける rationalism の遺産

の一なるが此は今日の現狀を說明するものとしては事實に合せず、又貨幣の起原を說明するものとしては既に歷史研究の反證を擧ぐるあり、博士の之を難ずる事既に久しかりしなり。

第三章價格論は價格と價値との關係を說き、價格は交換價値を貨幣を以て云ひ表はしたる交換價値なりとの學說を排し、價値は價格を定むる諸原因の一に過ぎずと云はる(一五八—九頁)而して價格を定むる原因は(一)需要供給品質との强弱(二)需要供給の數量(三)貨幣利用及支拂能力の大小なりとし、需給品質との强弱として利用及費用の關係を說明し限界利用の法則、最高生産費、最低生産費の法則等を說明す。

第四章所得論の中最も注意す可きは所得の淵源を論ずる一節なり(一七六—七頁)博士は所得の淵源を分ちて第一淵源及び第二淵源とす。第一淵源は經濟行爲にして細別すれば(一)、勞働(二)、財産の運用及び(三)、勞働並に財産の運用となり、又第二淵源は價値の移轉にして、一、契約締結の結果二、價値移轉の總殘高三、强制報償の三あり從て此點より所得を分類すれば一、契約所得二、殘高所得二、强制所得の三種類ありと云ふ。從來或種の所得が生産費の一部を構成するや否やは分配論に於て最も問題となりたる點なるが、博士の如く先づ所得の淵源を定めて然る後議論を進むれば此紛爭は最も明快に解決せらるゝに非ずや、卽ち殘高所得以外のものは悉く生産費の一部を成すものと云はざる可らず、然らば殘高所得たるものは何ぞやと云へば、答へて利潤之なりと云ふ。博士の言に從へば地代を以て餘剩ありと說明せんと試みたるリカードの學說はたゞ所得の中に殘高所得なるものありと云ふことを數へたる點に於て取る可し(一八六頁)と云ふ。長き時間を取りて見る時は契約所得、强制所得が大體如何なる高に歸着せんとするかの傾向は看取せられざるに非る可しと雖、其は別問題にして、或所得が生産費の一部

をなすか否かを第一項に定むるものは其所得が豫め確定せるものなるか、將た不確定なる殘高なるかの點なる可し。博士の所得論は此點を敎ふる事甚だ明瞭なりと云はざる可らず。

以上は經濟學敎科書の極めて粗末なる梗概なり。全篇を通讀して感ずる所は博士が「極要點のみを簡明に說述せんと企て」られたる爲め力めて疲癢を抑へ故らに筆を一端に止められたる事是なり。故に博士の縱論橫議盡さゞるなき底の著作を豫期して分量の不足を感ずるもの或はあらん。たゞ余は玆に謹んで通讀の印象を記述するに止め置くものなり。（小泉信三謹識）

Sindicalism and Labour, by Sir Authur Clay.

London, John Murray, 1911.

中判二百三十三頁　東京賣價三圓

'Syndicalism' と云ふ言葉が著しく世人の注意を惹く樣に爲つたのは最近佛蘭西に起つた大同盟罷工以來のことである。'Syndicalism' は實に玆數ヶ年間に於ける佛蘭西及び其他歐洲諸國に勞働爭議の性質に偉大なる影響を及ぼし來つたものである。一千九百十一年の英國ーこれも勞働爭議に惱された一つである。從つて本年夏以來の各雜誌には同盟罷工に關する論文が澤山掲げられてゐる。而して是等の論文の多くは必ず 'Syndicalism' に就いて云々し 'Syndicalism' に就いて云々すると共に又必ず Sir Arthur Clay の新著 'Sindicalism and Labour, Notes upon some Aspects of Social and Industrial Questions of the Day. を其オーソリチーとして引用せざるなきの有樣である。此書は僅々二百二十三頁の小編で大した深い研究の結果として表れたものでもなからうが所謂 'Questions of the Day' に注意を怠らぬ人若しくは怠らぬことを努めつゝある人々に取つては一讀の價値あるものである。近頃續々として此國で出版せられつゝある時事問題に關する著書の中でも特に興味のあるものであらうと思ふ。

彼は先づ第一 Syndicalism なる言葉の起源及び意義を說明してゐる。Syndicates と云ふ文字は英米では大低企業家聯合の意味に解されてゐるが、佛蘭西では勞働者の組合を要す言葉に Syndic と云ふのがあり、從つて又英國の Trade Unions と最も似寄つた言葉として Syndicats ouvriers と云ふ文字が使用されてゐる。しながら Syndicalisme と云ふ文字は佛蘭西でも極めて新しく出

來たものである。恐らく初めは一般に聯合組合が其共同の利益を增進するが爲めに採用した主義政策を表す爲めに用ゐられたのであらうが、最近に至つて佛蘭西では此言葉に一種特別なる意味が生じて來た。卽ち今や此文字は一般に 'Confédération Générale du Travail' の政策を表すものと認められる樣に爲つた。强力を以て現代の社會組織を破壞し、今の所有者の手から產業資本を奪つて此革命的勞働組合の所有に之を移すと云ふのが其目的である。而して這般の目的を貫徹せしむるが爲めに使用せらるゝ手段はと云ふと卽ち「一般同盟罷工」である。由來佛蘭西の勞働組合は之を二つに分けることが出來る。一は革命的の手段に依つて其目的を達せんとする Syndicats rouges で、他は國憲の許す範圍內に於て自己の地位を改善せんと努むる Syndicats Jaunes である。而して玆に所謂 Syndicalism なる名稱は前者の目的及び手段に關して使用せられつゝあるものである。

彼は次で Syndicalism の皷吹者 George Sorel の意見を其 'Réflexions sur la Violence' に據つて紹介してゐる。Sorel 曰く Syndicalism は社會が現に自己を惱しつゝある罪の汚を滌去ることの出來る唯一の手段である、而して革命の火に淸洗せられて社會は其最も崇高なる理想を實現することが出來るのであると。彼は更に進んで La Conbéfération Générale du Travail の起源から一千九百の九年卽ち一昨々年春に起つた郵便の同盟罷業、昨年の三月末に起つた馬耳塞 Inscrits Maritimes の同盟罷業、同年五月に起つた南部鐵道の同盟罷工などを中心として佛蘭西に於ける Syndicalism を說明し、政府の政策、及び之に對する社會主義者の態度を述べ、瑞典の同盟罷工から伊太利の Syndicalism 並に西班牙の一般同盟罷工にも及び、次で愈々英國に於ける Syndicalism に就いて筆を進めてゐる。

佛の Jean Jaurès は昨年十二月十日 Albert Hall の大會に臨んで彼は最近十ヶ年間に三度英米を訪ふたが其都度感ずることは英國に於ける勞働及び社會主義運動の著しい進步であると云つてゐる。單に Jaurès のみならず少しく眼ある者は皆同一樣の感に打たれること、思ふ。然しながら英國は太陸とは違ふ。英國民には英國民特有の血が流れてゐる。此國の社會運動勞働運動には自ら大陸と異つた色彩を帶びて居らねばならぬ。新しい時代の思潮に動されて古い勞働組合主義者の意見や一般社會の輿論は如何なる變化を受けたか、著者の筆は可成りによくこれを寫し出してゐる。Syndicalism と Trade Unionism' Syndicalism と Collectivism との關係など仲々に面白く論じてある。特に先頃非常に有名であつた所謂 Osborne 判決の影響などにも其筆を及ぼしてゐる。

英國に於ける Syndicalism の勢力は實際上に於ては未だ謂ふに足らぬものであるかも知れぬ。然しながら玆に憂ふ可きは同國の勞働組合が集產主義流に感化を受くることが次第に明瞭と爲りつ